
彼女が言うことには：西宮 東編

西宮 東

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼女が言つことには・西宮 東編

【著者名】

Z5889A

【作者名】

西宮 東

【あらすじ】

真夜中、起きると女の声がした。ついこの間死んだ女の幽霊の末練をはらすため良介は、「面白そう」と理由だけで彼女につきあうことに……

(前書き)

グループ小説と言つ企画で書いた小説です。是非他の先生の小説も「グループ小説」で検索すれば出てくるので見てみて下さい。

かた。じわ。ざわ。ぎつ。

そのどれともつかない様な音が良介に聞こえ始めたのは何時頃からだつただろう。寝始めてからすぐだつたかもしないし、夜半過ぎだつたかもしれない。とにかく小さな音が断続的に良介の部屋の中で鳴り続け、耳から離れなかつた。

つるさい。

いつしか良介の頭の中はそんな単語で埋め尽くされ、睡眠という概念が脳の中心に居座れなくなつたので、良介は仕方無しに起きた。変な体勢で寝ていたのか、まるで生氣を抜かれたかのように身体が重い。それ以上に身体の上にのっかっている布団が重かつたので無理矢理どかせた。

重たい音と共に良介の散らかつた部屋の床に布団が落ちる。そんなことは気にせず、カーテンを閉め忘れていた窓から何気無く外を見る。

月の見えない、気持ちばかりの星だけが散りばめられた汚染された都市の夜空が見えた。

真つ赤な月なんかより、何もない夜空なんかよりよっぽど怖い空だ。

そんなモノからはすぐに目を離し、今それなりに必要な時計を見た。寝ぼけ眼が徐々に正常に、正常な目が段々暗順応をして、ようやく時間がわかつた。

「げつ……三時半かよ……」

起きることはあまりにも早すぎる時間。普段なら熟睡の真つ直中であるはず。それが起きていても気が付きそうにない微音で起きてしまつた。

その不快さに軽く舌打ちをし、部屋を見回す。早いところの不快音の犯人を暴いて、さつと一度寝をしようと灯りをともす。長年住んでいるこの部屋だ。灯りなんぞなくとも、電気のスイッチぐらい分かる。

ぱちん、という乾いた音に続いて部屋が明るくなつた。

右を見て、左を見て、念のために天井もベッドの下も確認した。

当然の「」とく何も無い。ある訳がない。

そんな当たり前のことにはつとして、すぐに布団をベッドの上に戻つて掛け布団の上に寝転がる。眠くて眠くて仕方なかつたので電気を消す氣にもなれず、うつ伏せになり左手をベッドの外に投げ出す。

「　　て
　　つ！」

確かに聞こえた音。いや、《声》。

人間の聞く音階から外れている所為なのか、聞き取れなかつたが間違えなく《声》だ。それに敏感に反応してしまい声にならない声を上げる。

いつから良介の部屋はホラーな空間になつてしまつたのか。間違えなく昨日までは日常的な夜を過いした。それなのに何で今日になつてこんな《声》が聞こえるようになつた理由は良介には見当もつかない。

「話を聞いて」

今度はちゃんとした人間の音階で《声》がしたんでしつかりと聞き取れた。

割と軽い女の声。幽霊にありがちな恨めしさや懇願・哀切の類は声に混じつておらず、日常的に友達にでも話しかける感覚。

「おーい、聞こえてないのー？聞こえてないならどうかいくよ？」
「ああ、『じめ』」

返事をしてしまった。致命的なミス。これではまるで危ない人だ。焦つて途中で口を押さえ、言葉を止めたがもう遅い。

「なんだ、聞こえてんじゃん」
「声は聞こえど姿は見えず、つてところ」

人間、本当に不可思議な出来事に遭遇したときになると行動は大まかに分けて二つ。

現実逃避にパーカーするか、逆に落ち着く。どうやら良介は割合の圧倒的に少ない後者だったようだ。

「あ、そなんだ。今、目の前にいるんだけど見えてる？」
「見えてねえ　つて、おわっ！」

いきなり目の前に現れた女性。グラデーションの様にゆっくり変わるのでなく、テレビのチャンネルが変わるくらい唐突に現れた。

「一応言つとくけど、不法侵入だな」
「一応言つとくけど、幽霊は人間の法律外」

いくら落ち着いているとはいえ、目の前で『幽霊だ』なんて言われても良介に信じれるはずがない。

それに夢という可能性もある。それなら時間帯が三時半だというのも納得がつく。だから良介はなんでここにいるのかなんて無粋な事は訊かなかつた。

「幽靈さん、一般市民である俺に何の用?」

「そこまで平静でいられるなら、幽靈としてはショックな気もするが、下手に荒てるよりはいいね」

女幽靈はかすかに笑い、一方的に話を始めた。

「私、ついこの間、死んだんだけど、心残りがあつて。簡単に言えば手伝えって話なんだけど」

「実際に簡潔な話なことで」

突然出てきて、手伝えなんて血口の中にもほどがある。

ふと、幽靈ってことは自分は憑かれているか、この部屋の地縛霊にでもなったのかと思つた。出でいく、と言つてはいる以上憑かれているのだろう。

したがつて女幽靈と一緒に住まなければならぬといつて事になる。出て行くならそれでもいいと思つたが、相手の方が立場は優位。良介に選択肢はなかった。

「オーケー、手伝つてやるよ」

「えらいくあつさりだね」

どうして、と幽靈は尋ねる。良介はそのままこと細かく言つのもあらしこと想つて、

「面白そつだから」

簡潔にまとめてそつと語つた。

朝起きると田の前に女がいた。

昨夜のことを忘れるほど良介の記憶力は悪くない。夢オチにしたかつた良介としては残念至極。

あの後、そのまま起きているのも辛いので良介はそのまま寝た。常人からは考えられないほどの精神力だ。

「おはよ」

「……おはよう」

比較的目覚めのいい良介は落ち着いて対応した。

そんな良介をみてか、その幽霊はいろいろな過程を飛ばして話を始める。

「でさ、今日は」

「待て」

さすがに良介はそのテンポについていけなかつた。それに、いろいろ考へなくてはならない事がある。

今日は五月第三週の月曜日。つまり平日で学校がある。そこまで良介は眞面目でないからサボることにした。

問題は情報量が少なすぎる事。

「俺の名前は良介。お前は？」

そう、良介たちは未練どころか、互いの名前をせも知らない。

「今更だけど、あたしの名前はゆうづ。よろしく」

握手しようとしたが当然の如くすり抜けた。分かっていたので、一人ともが苦笑いするだけで済んだ。

とりあえず着替えるため、ゆうりに視線をはずしても「うう」。一応学校をサボっているのだからそこまで目立つ格好をするわけにもいかない良介は、わりとラフ目の服を選択した。

家中でこうしていても仕方ないので、親にばれなにようにそつと家を出る。その時に分かつことなのだが、良介以外にゆうりは見えていないらしい。

これでは外でおちおち話すことも出来ないので、一人で考えた末に思いついたのはケータイをずっと耳に当てておく事だった。公共機関内ではそういうわけにもいかないので、メールに文字を打ち、代用する事に決定。

外に出てからはゆうりの指示に従い、バスを使って隣の町まで来た。

その間にゆうりと良介の会話で分かったことがいくつかある。主に良介がゆうりから話を聞く形だつたが。

まず、ゆうりは良介から一定距離はなれられないという事。憑かれているのだから当たり前と言えば当たり前だ。

そして、互いが同じ年など、有利にとつては生前だが、いくらか共通点がある事。

だが分からない事もある。それはゆうりがついた理由。同じ年の人間なんて世界にごまんと居る。その中で良介が選ばれた理由だけははつきりしなかった。それにお互いに探ろうともしていなかつた。そんなことを話している中で最も重要だつたといえば、やはりゆうりの未練について。

ゆうりの口から時々思い出したように発せられる長めの言葉を良介がまとめると、

『母親のために買い物へ行き、そこで事故にあつたから、その買い物を母親に届けたい』

という感じだ。良介はえらく小さな願いだと思つたが、口にはし

なかつた。すべき事ではないし、当人にしか分からぬ感情もある。それは他人が蹂躪してはならない事であるぐらい良介も理解していた。

バスを降りて、ゆうりに言われたとおりに歩くと花屋に到着。そこで黄色い花を四つ、赤っぽい花を一つ買った。もちろん良介のお金で。

せりに歩いていくある家の前でゆうりは突然、

「止まつて」

と余裕のない声で言葉を発する。

家の玄関に目をやるとそこには『喪中』と和紙に書かれた字が貼つてあった。ここがゆうりの家らしい。

「これから私が言つ事をそのままにも言わず再現してね」

良介は無言でうなづく。何も言つなどいわれたからにはもう喋らない。

「まずケータイ仕舞つて」

ケータイを折りたたみ、電源を切つて、良介はバックに放り込んだ。

「家の前に花をおいて」

綺麗にラッピングされた花束を玄関を開けても邪魔にならない位置に置く。

「チャイム鳴らして」

軽く指で押すと、ピンポーンと軽快な音が鳴る。

「さあ、ダッシュ！」

「はあ？！」

思わず良介は声を上げてしまつたが、よく考えたら当たり前だ。ここに良介がいても説明の仕様がない。

スタートが遅れた分、全力疾走して玄関がギリギリ見えるぐらいの位置で緊急停止した。

息を整えていると、だいぶ遅れて力のは入つてないのが分かるほど衰弱しきった女性が出てきた。その女性は間違いなく、ゆうりの母。その女性を一人は固唾を呑んで見守る。

玄関にだれも居ない事を不思議に思つてか、辺りを見回すゆうりの母。そして地面で視線が止まる。途端、その人は全てが通じたのか感情を抑えきれず声を上げて泣き出した。

地面に置かれた黄色四つと赤一つの『カーネーション』を見て。良介はそこを一步も動かず、その場にただ立ちぬくしていた。

二人は何も言わずに部屋に帰つた。

家に着く頃にはもう口はだいぶ傾いており、空は真っ赤だつた。

「あー、疲れた……」

「ははは、ご苦労様」

部屋に入るなり良介は突然しゃべりだした。

「でも、面白かった」

「それは人の感情としてどうかと思つよ」

それもそうだな、と良介は笑い飛ばした。それにつられるよつてゆうりも笑う。

一人は少しだけ最後に話し合つ。

良介はゆうりが送つた『カーネーション』は母の日のプレゼントつて言うのは自分ですぐ分かつたが、何で母親までもがゆうりからのプレゼントと分かつたのかを訊いてみると、答えはすぐに返つてきた。

毎年同じものを送つてゐるから、だそうだ。笑えるぐらい単純。だから一人してまた笑つた。受け取つた母親からみればそれで十分なんだと思うけど。良介は未練にしては十分に大きい理由だな、と皮肉まじりに答えておいた。

「ああ、そういえば」

そろそろ話題がつきかけてきた頃、良介は何の前触れもなく少し重めの口調で言葉を紡ぎ始めた。

「一応言つとく。さよなら」

「そだね、私とももうおさらばだね」

自分が消えるといつにゆうりはえらくあつたりと受け入れた。良介には幽靈よりも濃い未練があるといつに。

「じゃあ私も一応。さよなら」

たはは、と笑いながらゆうりは言つ。一緒に一皿を過ごし、ゆうりはどうしていつも素直に笑えるのか不思議で仕方なかつた。

もう一人ともが別れを告げ終わり、ゆうりには未練はない。もう

一度良介が目を閉じればゆうつは居なくなるだらう。幽靈なんてそんなもの。部屋までやつてこれたのが不思議なぐらい。目が乾いてきた。そこで良介の悪知恵が働いた。

「もう一ついい忘れた」

「ん？」

目を閉じかける。だが閉じる寸前に、良介は一つの《闇》をゆうりに仕掛けた。

「お前のこと、好きだ」

「へ？」

良介の目に最後に映ったのはゆうつの睡然とした間抜けな顔だった。

もう目を開いてもゆうつはそこには居ない。だから目を開くことなく、良介はそのまま眠りについた。

後日談。

朝起きると目の前に女がいた。

本人曰く、良介が言った最後の言葉が未練になり、そのまま現世に残つてしまつたらしい。

良介は自分の愚行と先の事を考え、そつとため息をついた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5889a/>

彼女が言うことには：西宮 東編

2010年10月17日17時30分発行